

2. 現地普及活動事例の概要

1) かぼちゃの貯蔵性向上で端境期出荷を目指せ！～美深町におけるつる枯病対策の普及～

上川総合振興局 上川農業改良普及センター上川北部支所

1. はじめに

美深町のかぼちゃは、全道3番目の作付面積を誇り、地域の特産品となっている。産地戦略の中で、長期貯蔵を行い、単価の高い12月出荷（端境期）を目指す取り組みが始まっていた。

しかし、平成24年に契約販売先で出荷後に果実腐敗が発生して大問題となり、産地としての信頼度が揺らいだ。農業試験場で病害診断をした結果、全ての腐敗果は「つる枯病」によるものと診断された。そして平成25年度から上川地域農業技術支援会議で「つる枯病」対策の確立を目指して取り組みを開始した。

2. 実態調査結果

1) 「つる枯病」の発生実態

農業者9戸の計10サンプルをJA定温庫で約60日間貯蔵した結果、「つる枯病」発生率は3～62%と個人差が大きかった。また、貯蔵腐敗における「つる枯病」の発生割合は85%であった。

2) 連作と残渣処理の実態

農業者75戸を対象にアンケート調査を実施した結果、栽培面積の63%が連作ほ場で、残渣を全て収穫直後にすき込んでいる農業者は38%にすぎなかった。連作ほ場が多く、秋すき込みの実施率が低いことから、罹病残渣が翌年の感染源になっていると考えられた。

3) 連作の影響

契約栽培農業者20戸の契約先から届く出荷レポートに基づき正品率を調査した結果、連作ほ場の割合が高い農業者ほど正品率が低下する傾向が見られた。

4) 薬剤防除の実態

生産履歴から、「疫病・うどんこ病」対策を主体とした防除体系であった。「つる枯病」に効果のある薬剤を使用しているにもかかわらず、正品率との関係は認められなかった。また、無防除でも高い正品率を維持している事例もみられ、風乾方法および風乾環境が発病に影響していると考えられた。

5) 風乾環境が発病に及ぼす影響

同一ほ場で生産されたかぼちゃを、風乾環境が異なる6戸の農業者で風乾後、JA定温倉庫で貯蔵した。その結果、風乾環境によって「つる枯病」の発生率に差が見られた（図1）。

このことから、風乾環境の異なる農業者2戸を抽出し、コンテナに温度・湿度計を設置して風乾環境を確認した結果、日中の気温を25℃以上確保し、差圧通風を行うことで「つる枯病」の発生を軽減できることがわかった。

3. 活動の経過

1) 連作ほ場が多いことから、生分解性マルチの普及により、秋すき込みの実施を推進した。

2) 防除体系を「疫病・うどんこ病」主体の体系から「つる枯病・うどんこ病」主体の体系に見直した。

3) 風乾環境が「つる枯病」発生に大きな影響を与えることから、風乾環境の改善を支援した。

4. 活動の成果

1) 当初、生分解性マルチの使用割合は5%程度であったが、平成30年には50%を超えた（本資材使用者は秋すき込みを実施）（図2）。

2) 「つる枯病」に有効な薬剤を選定し、防除体系を見直したことにより、「つる枯病」に対する防除回数が0.8回から1.9回に増加し、総防除回数は4回から3回に減少した。

3) 契約栽培に取り組む18戸を中心に、風乾場所の温度・湿度管理について改善提案を行った結果、正品率は当初より向上し、個人差が小さくなった（図3）。

4) これらの取り組みにより、物量がなく11月で出荷が終了した平成26年を除いて、端境期出荷量が年々増加している（図4）。

5. おわりに

今回の取り組みによって貯蔵性の高いかぼちゃが生産され、国産品の端境期となる12月の安定出荷の増加につながることを期待する。

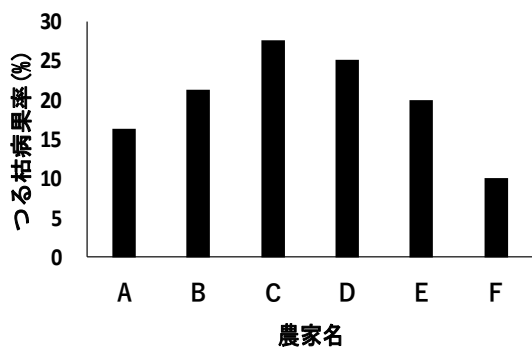


図1 つる枯病果率 (H28年)

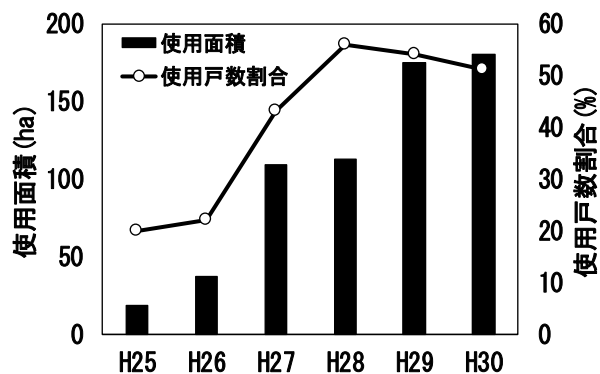


図2 生分解マルチの使用面積と戸数割合

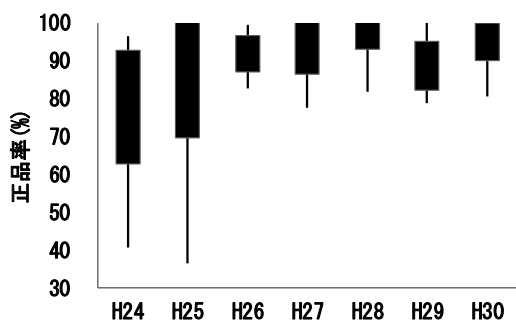


図3 契約出荷における正品率

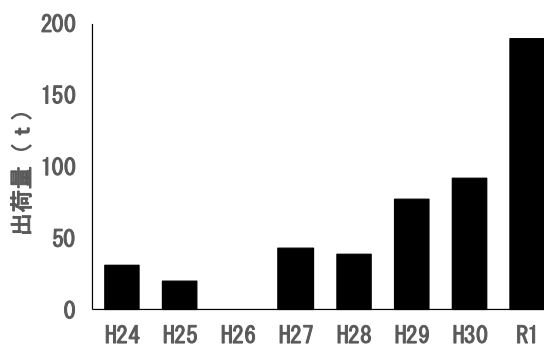


図4 端境期出荷量の推移 (12月出荷)

表1 つる枯病防除対策

耕種的防除	<ul style="list-style-type: none"> ・ 連作を避ける ・ 連作する場合は、前年の秋に残渣をすき込んでおく
薬剤防除	<ul style="list-style-type: none"> ・ 開花後20日目と30日目にTPN水和剤F (53%) を1500倍で散布する
風乾方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ 風乾場所の気温を日中25℃以上確保し、7日間日中だけ差圧通風する ・ 資材は遮光率80%の資材を使用する